

「あなたにとって、良い家ってどんな家ですか？」
そんな質問をされたら、あなたはなんと答えますか。

ある人は、暖かい省エネ住宅と言うでしょうし、またある人は、デザインの優れた家と言うかもしれません。人それぞれに、「良い家」の価値観が違う訳ですから、回答者からすれば、全てが正しい答えです。

現在はインターネットの発達により、情報過多の時代にあります。膨大な情報を閲覧するなかで、また新たな価値感を覚える人も多いはずですが、価値観の多様化は、ユーザーニーズの多様化に直結しています。

だから、住宅の設計は難しい。
良い家って何なんですか・・・本当に。

住宅の設計を仕事にしている以上、この思いからは、逃れる事ができません。だけど「良い家って？」という問いに対しては、自分なりの答えを持っています。

良い家II愛される家

とても曖昧ですが、私はこれくらい曖昧な感じの方が、丁度良いと思っています。むしろ、限定的な考えを持つ事のほうが、間違った感覚なのかもしれないとも思っています。

家づくりの情報の中には、耐震性能や高气密高断熱等の、住宅の基本性能や機能を数値化し、良い家の条件かのように唱っていますが、確かに、それも、家づくりに欠かせない重要な要素と認めながらも、一番の重要事項だとは思っていません。

もっと大切な事は、どうすれば居心地が良くなるのか、どうすれば楽しめるのかを、住宅の機能として盛り込む事だと思っています。

それは、とても曖昧な事。だけど確実に良い家に結びつくキーワードだと思っています。



突然ですが、写真の家を見て、どういう印象を持つでしょうか？大概の人は、モダンで今っぽい住宅だと思われるのではないのでしょうか？

実はこの家、東京都の有形文化財になっています。

別にお寺でも教会でもありません。文化的に価値のある建物なので、有形文化財に認定されています。

この家の住人は、土浦電城（つちうらかめき）という建築家で、この家が建てられたのは74年前の1935年なんです。信じがたい話ですが、事実なんです。

「良い家って何だろう・・・デザインって・・・」

この家を初めて見た時の感想です。

近代建築の巨匠である ル・コルビジエは、「住宅は住む為の機械である。」と言いました。

住宅を生活する為の道具と例えれば、機能的で便利の方が良いように思いますが、その機能が一過性のものであった場合、便利が不便に変わってしまいます。

何故なら、住宅の基本性能は、現時点で最高の物を取り入れたつもりでも、数年後には、時代遅れになっている可能性が高いからです。ひょっとしたら数年後には、太陽光発電が当たり前になっているかもしれません。

それは、過去を振り返れば理解できます。
ひと昔前には、どこのモデルハウスにもちよつとした畳コーナーがありましたが、今では探すのも難しいでしょう。勿論、その当時に新築した家には、高い確率で畳コーナーが存在すると思いますが、今では使いもしない物置スペースになっているのではないのでしょうか？

確かに当時のユーザーのニーズには、生活の洋風化に對して、未練が残っていた様に思います。今までの畳に座布団の茶の間生活から、フローリングでソファのリビングに移り住む訳ですから、それも仕方ない事ですが、ちよつとゴロつとなるスペースとして設けられた畳コーナーは、そんな不安を抱いたユーザーには、画期的なアイデアに見えははずです。

冬にはコタツで鍋を囲んで暖をとり、ゴロリとなってテレビを見るというイメージだったはずが、新居で実際に生活が始まると、リビング脇に設けられた畳コーナーからはテレビが見つづらく、わざわざコタツを出さなくても十分に暖かい・・・何の為に畳コーナーを設けたのか。それくらいだったらリビングをもっと広くすれば良かったのでは・・・と、たんだ洗濯物の山が置いてある畳コーナーを眺めて後悔してしまう。

「木を見て、森を見ず。」という言葉がありますが、家づくりを進める上で、夢を追いすぎて細部のディテールにこだわり過ぎ、本当に大切な目的を見失っている場合が多いように思います。本当に大切な事は、気持ちや感情の部分にあると思います。自分の家に帰るとほっとするとか、一番リラクセスできるとか・・・。

総ヒノキ造りの家や、極太の大黒柱で建てる家が価値あるものと思われていたような時代に、この家はどのような評価だったのでしょうか？少しでも広い家が、良い家の絶対条件だった時代に35坪のLDKワンルームでスキップフロアのこの家は、当時としてはモダン過ぎて、良い家の概念から外れた建物に見えたのではないのでしょうか？ しかし74年経った今でも、その白い箱型の木造住宅は、微塵も古さを感じさせず、今も尚、歴史を刻みつつけています。

住宅産業に従事する人間は、この家に習うべき事がたくさんあると思います。住宅において本当の価値は、その場しのぎの一過性のものであるはずがありません。

住宅は、そこに住まう家族の使う道具です。大切に使う為にはそれ相応の思い入れが必要になります。その思い入れが、やがて愛着になります。

良い家は、そこに住まう家族に愛されているはずですが、そんな空気が流れている家は、ひょつとした地域からも愛されているかもしれません。

思い入れのある家だからこそ、ちゃんとメンテナンスして大切に扱われます。だから、愛着が湧きます。家族の変化によって、多少不便が生じてても、なんとか家族の工夫で問題をクリアします。そしてそれが、大切な思い出に変わります。そんな家は長持ちします。そして、家に対しての思い入れは継承され、住み継がれていきます。

思い入れは他人任せでは生まれません。家族の対話を重ねて、将来のビジョンを求めなければ本当に住みよい家なんてできるはずがありません。



当時の竣工写真

又、住宅のデザインにも同じ事が言えると思います。何故なら、住宅はデザインのみでは機能せず、機能の中にデザインを形成しなければならぬからです。

例えば、玄関をどんなにモダンにつくろうとでも、そこには、子供の自転車とまり、靴が並びます。それを隠す機能があつて初めてデザインが成り立ちます。それか、そう言う状況でもデザインがそこなわれない工夫をするかです。

実際には、雑誌に出てくる家や、モデルハウスの様に生活感を消したいと思つても、住宅は、生活の場なので、生活感を消す為にはそれ相応の覚悟が必要になります。しかし、それほど成熟した覚悟を持つて生活をされている方は少ないと思います。よほどゲストを招いたり、週末だけ利用する別荘ならともかく、そうでない場合は、例えモダンな空間を与えられても、自分勝手に使い勝手構築していくのではないのでしょうか。それが、デザイン上、良い悪いは二の次になつてしまふ事が殆んどです。

車のように、何年か乗ったら買い換えるような、安い替えスパンの短いものであれば、その時々気分によつてデザインを決めても良いと思いますが、住宅は長く使う事を前提にデザインを決定する必要があります。車は、古くなったり、デザインに飽きてしまつと、どうせ買い替えるんだからと言わんばかりに、粗末に扱つてしまいがちですが、住宅は、例え古くなつても、デザインが飽きようとも、簡単に買い替える訳には行きませんし、大切に住まなくてはならない訳です。

大切に住まう事の源泉は、気持ちや感情の部分にあると思います。つまり、愛着です。型式の古い車を、あえて格好良く乗りこなしている人を見ると、車に對しての愛着を感じます。住宅も同じ事が言えるのではないのでしょうか。

住宅会社の言われるままに、家族が仲良くなる家を建てたつもりで、リビングに動線が集まる間取りにしたとしても、家族の思いや同意がなければ、家族が仲良く住めるはずがありません。余計に、個室に閉じこもつてしまします。そして住みづらimageばかりが残つてしまします。せっかく長く住み継いでもらおうと万全をつくつて造つた家が、建替える必要もないのに、子供の世代で建替えてしまつた事になりかねません。

世の中には良いデザインの家は少ないです。又、良いデザインの家でも、住みづらい家もたくさんあります。かと言って、住まいにデザインは必要ない訳ではありません。そこに住まう家族にとって愛着の湧くデザインの家でなければ、長く愛す事はできないと思います。そして、そのデザインは、家族の手によって、家族の変化にあわせて変わっていきます。そんな家は中に入ると、その家族の手柄が分かるような空気が漂っています。豪邸でなくても、十分に良い家になっているはずですが。

良い家に定義はありません。性能やデザインが優れているからといって良い家と言う事ではありません。何故なら、性能やデザインは将来的には優れていないかもしれないからです。

ただ、抽象的な部分にのみ「良い家」の定義が成り立つ可能性がありません。

良い家II愛される家

そんな家をどうすればつくれるのか・・・。

住宅を設計する立場として、これからも考え続けていかねばなりません。